

郷土を知る
むかしむかし

昔々の そお市

開

第76回



ゴツタンの名手
～荒武タミ～

生涯学習課 文化財・市史編纂室 ☎ 0986-76-8873

荒

武タミは、明治44年（一九一一年）、現在の霧島市福山町比曾木の

で生まれました。5歳の時、麻疹による高熱のため両目の視力をほぼ失ってしまいます。母親は終生病気を悔いたそうです。家は豊かではなく、目が不自由なタミも子守り奉公に出て家計を支えていたそうです。

タミが13歳になった頃、三味線を習い始めます。当時、農村部では小学校を卒業した年頃の女子に三味線（高価な三味線の代わりにほとんどはゴツタンで練習した）を習わせる習慣がありました。母が苦しい生活のなかで三味線を習わせたのは、タミに生きる術を身につけてほしいという親心だったのでしょう。タミも懸命に稽古に励み、課題として出された曲全てを習得しました。タミが正式に三味線を習った時間はわずかな期間でしたが、その後も子守りをしながら、他所から聞こえてくる音を聞き、木の枝を三味線がわりに稽古を続けたそうです。

16歳の時に母が亡くなります。一人で生きていくために、家々を回り三味線を弾く「門弾き」を始めます。若いタミは、門弾きでもらいものをするごとに相当の決心がいったそうです。国分の町や比曾木野周辺の集落を回り、時には目の見えないタミをからかう心



荒武タミ

無い人もおり大変な苦労があったと言います。やがてその腕前が評判となり、三味線の先生として生活ができるまでになりました。財部町大川原に居を構え、三味線と郷土の楽器ゴツタンの指導にも力を入れていたそうです。昭和52年（一九七七）、66歳になったタミの人生が花開く時がきます。ある民俗芸能の研究者に見いだされたタミは、東京国立劇場の舞台に出演、未知の民俗楽器ゴツタンの発見とともに一躍世間の脚光を浴びました。

母は生前に「負けて勝て」という言葉を残していたそうです。どんな苦労があっても我慢していれば、先々良いことがあるという教えます。タミが経験した苦労は、筆舌に難いものだったと思います。苦労に耐え抜いたタミが奏でる音色は、その人生が深く刻まれた特別な音色です。

曾於市史編さん情報局

地域に伝わる子守唄などの民謡をご存じありませんか？音声記録や映像記録、歌詞など、情報をお持ちの方は、生涯学習課までご連絡ください。



タミのゴツタン

ゴツタン・・・南九州に伝わる民俗楽器。三味線に似ているが、胴が板張りで素朴。指で弾いて演奏する。